

## ディスポジションとしての政治的力について

大河原, 伸夫  
九州大学大学院法学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1657809>

---

出版情報 : 政治研究. 62, pp.1-35, 2015-03-31. 九州大学法学部政治研究室  
バージョン :  
権利関係 :

# デイスポジションとしての政治的力について

大河原 伸 夫

はじめに

第一節 デイスポジション、出来事、仮言言明

(一) デイスポジションと出来事

(二) デイスポジションと仮言言明

第二節 推論、半-仮言言明

(一) デイスポジションと「推論のための切符」

(二) 半-仮言言明

第三節 課題と含意

(一) 仮言言明の精緻化

(二) デイスポジション概念の機能

結び

## はじめに

政治の中で、力の「保持」「分布」「行使」「發揮」「現実化」「誇示」「獲得」「掌握」「喪失」「継承」「均衡化」等々に  
ついて語られる。「力(たとえば権力)」を保持する「力(たとえば勢力)」が分布する「力(たとえば影響力)」を行使す  
る「力(たとえば権力)」という語の指示対象を保持する「力(たとえば勢力)」という語の指示対象が分布す  
る「力(たとえば影響力)」という語の指示対象を行使する「等々を意味しているのであろうか。それらを意味していな  
いのであれば、何を意味している(あるいは、意味し得る)のであろうか。これらの問題に答えることは、力をめぐる  
政治的ディスコースの明晰性を高めるといふ観点から、有意義であろう。<sup>(1)</sup>

これらの問題に答える一つの手がかりを、力はディスポジション(の一つのタイプとしての能力)であり、ディスポ  
ジションに関する言明は仮言言明の集合へと分析されるべきである、という考えが提供している。

そうした考えは、ライルの *The Concept of Mind* (Ryle 1949) で詳しく示されている。ライルは、その議論に対し  
概ね批判的な或る論者によつても、「心的状態に関するディスポジションナリズムの知的先祖」と呼ばれている (Schwitz-  
gebel 2002, p.259)。同書は、「日常言語における心理に関わる用語の意味を分析する」ことを目的とした「ディスポジ  
ショナルな概念の使用」の「最も有名な例」とされる (Harré 2007, p.184)。「心に関するほとんどの命題」が「仮言的」  
であると示したことは、ライルの「最も際立った貢献の一つ」を成す、という評がある (MacDonald 1951, p.83)。ライ  
ルの心身二元論批判を受け入れない研究者も、仮言言明を中心とするライルのディスポジション論は受け入れる場合が  
ある、とされる (Martin and Heil 1998, p.310 n.12)。

ここで、政治における力をディスポジションととらえる研究に目を向けよう。そうした研究には、ネーゲル、ロング、  
モリス、ルークスによるものがある (Nagel 1975, Wrong 1995/1979, Morriss 2002<sup>(5)</sup>, Lukes 2005<sup>(6)</sup>)。  
ネーゲルは、「力」及び「選好」をディスポジションととらえる。そして、「選好」に関する言明を仮言言明へと分析  
しつつ、「力」を「選好による、結果の引き起こし (causation)」と定義する (Nagel 1975, pp.24-27, 30, 175)。ネーゲ

ルの議論は、力に関する言明の仮言言明への分析と密接に関係するかの如くである。しかしネーゲルが着目するのは、「実在的な物・人・出来事の間の関係ではなく、理論の変数間の関係」としての「因果性」であり、「選好を表示する変数」と「結果を表示する変数」の間に因果関係を設定する「理論」を前提とする「力の帰属」である (Nagel 1975, pp. 30, 40)。本稿では、変数から成る「理論」を前提に力について考察するわけではないので、ネーゲルの議論の検討は必要ないであろう。

ロングは、「デイスポジションナルな」語である「力」を、「人々の、他人に対する意図され予見された影響をうみ出す能力」と定義している (Wrong 1995, pp.1-2)。しかし、力に関する言明の仮言言明への分析については論じていない。ルークスによれば、「力は「中略」デイスポジションナルな概念であり、ある範囲の状況の下でもし力が行使されるならば何が起こるかを特定する、条件のあるいは仮言的な言明の連言から成る。従って力は、一人又は複数の行為者の——彼らが行使するかもしれない、行使しないかもしれない——能力 (ability or capacity) を指す」 (Lukes 2005, p.63)。しかし、ルークスが「条件のあるいは仮言的な言明」に言及しているのは、この箇所においてだけである。モリスは、「随意的に行使され得る力」を、デイスポジションの一つのタイプとしての「能力 (ability)」と理解する。そして、「能力」に関する言明の仮言言明を含む言明への分析について、詳しく論じている (Morris 2002, pp.24-25, 52-54)。上述のように本稿では、デイスポジションに関する言明は仮言言明へと分析されるべきであるという考えに焦点を合わせるので、検討を要するのはモリスの議論であろう。

本稿の構成は、次の通りである。第一節で、デイスポジション、出来事、及び仮言言明に関するライルの議論を要約し、関連文献に言及する。第二節で、推論及び半仮言言明に関するライルの議論を要約し、関連文献に言及する。第三節で、デイスポジションに関しさらに検討を要する課題を取り上げる。また、ライルのデイスポジション (特に能力) 論の含意について述べる。以上の各節で、モリスの議論の検討を行う。

本稿は、政治的力をデイスポジションととらえる研究分野に属している。第一〜三節の作業により、デイスポジションとしての政治的力について知見を得る。その上で、力をめぐる政治的デイスコースに関する上記の問題に答えたい。

## 第一節 デイスポジション、出来事、仮言言明

### (一) デイスポジションと出来事

ライルは、デイスポジションについて説明するにあたり、それと出来事の違いを強調している。出来事との対比で、デイスポジションをどのように特徴づけ得るか—まずこの点に関するライルの議論を要約しよう。

ライルによれば、「出来事」は「現実<sup>(9)</sup>に生起している事柄」である。デイスポジションには、「傾向」(tendency)「能力」「習慣」など様々な種類があるが、これらは「現実<sup>(9)</sup>に生起している事柄」ではない。たとえば、「牛は反芻動物である」という言明は「牛が今反芻している」と述べておらず、「彼は愛煙家である」という言明は「彼が今タバコを吸っている」と述べていない。「反芻動物である」の意味は「ときどき反芻する傾向がある」であり、「愛煙家である」の意味は「喫煙習慣をもっている」である (Ryle 1949, pp.116-117; pp.162-163)。以下『心の概念』から引用する際、「Ryle [1949] は省略する」。「地球は丸いと信じている人は、時々確信をもって『地球は丸い』と認知し、『判断』し、あるいは内的に再度主張するという独特の過程を経る」わけではない (p.44; p.52、一部拙訳)。「信じている」の語は、「信じている」という状態」に対応するわけでもない (pp.118-119; p.165)。

出来事については「外的」(overt)・「内的」<sup>(10)</sup>「目撃可能」・「目撃不可能」という区別が成り立つが、デイスポジションについてそうした区別は成り立たない。「声高に話す習慣それ自体は声高でも物静かでもない」と同様、「外的な、あるいは内的な作業において発現される技能、好み、性癖などは、それ自体は外的なものでも内的なものでもなく、また目撃可能でもなければ目撃不可能でもない」<sup>(11)</sup>。デイスポジションを「目撃不可能な心的原因」ととらえるのは、またデイスポジションの発現をそうした原因の「目撃可能」な「身体的結果」ととらえるのは、誤りである (p.33; pp.35-36、一部拙訳)。<sup>(12)</sup>

一つの語が、デイスポジションと出来事の両者を表す場合がある。たとえば、「ギリシア語のアルファベット」を「記憶している remember」と述べるとき、「今あることを行なったり経験したりしている」と述べているのではない——ギリ

シア語のアルファベットを初めから終りまで言うこと「中略」を行なうことができる」と述べているのである。他方、弁護士が証人による経験を「想い出す remember」ことを求めるとき、それは出来事を指している (pp.272-273; pp.400-401、一部拙訳)。「欲する」「望む」「誇る」などの語も、「時には単純な性向を表わし [stand for—引用者注]<sup>(13)</sup>、また時には、それらの諸々の性向自体から生じたり、それらの性向の発現が阻害された結果生じたりする動揺<sup>(14)</sup>を表わす」(p.98; p.132)。

ライルが―出来事と比較しつつ―デイスポジションをどのように特徴づけているかを概観した。ライルに従えば、デイスポジションとしての政治的力は「現実に生起」していないということになる。

「はじめに」で言及したモリスは、「行使の誤謬」について論じている。モリスによれば、デイスポジション概念は、「物の比較的に持続する能力 (capacity)」を指す<sup>(15)</sup>。その点で、デイスポジション概念は出来事を表す概念とは異なっている。両者の混同に基づく、「何かを行う力はそれを行うことに過ぎないという主張、人が力を持つと語ると、人がその力を使用していることを形而上学的に正当でないやり方で語ることには過ぎないという主張」は、「行使の誤謬」を犯している。たとえば、ダールは、「CはRに対し力を持つ」と「Cの行動はRの行動を引き起こす」を同義とするが、その際そうした誤謬を犯している (Morris 2002, pp.14-15)。以上のモリスの議論は、デイスポジションと出来事の相違に関するライルの議論と整合的である。

## (二) デイスポジションと仮言明

「仮言明」は、ライルのデイスポジション論の核心に位置している。

ライルによれば、「あるデイスポジション的な性質を持つ」ということは、「特定の状態にある、あるいは特定の変化を被る」ということではない。それは、「特定の条件が現実化したとき、特定の変化を被る」ということである (p.43; 拙訳)。「傾向性という性質を帰属させる」ことにより、暗黙のうちに「仮言的命題」が伝達される (p.43; p.51)。たとえば、「ガラスが砕けやすい」と述べることは、「もしそれが叩かれたり、歪められたりするならば粉々に飛び散るであろう」

あるいは「叩かれたり、歪められたりしていたならば粉々に飛び散っていたであろう」と述べることである。そのガラスは「現実にはけっして砕けることがない場合においてさえも、それが砕けやすいものであるということはある」（p.43; p.50）。

「砕けやすさ」の「現実化」から生じるのは、「粉々に飛び散」ることであり、それ以外にはない。傾向性の中には、「ほぼ斉一的」に「現実化」されるもの「単一的」(single-track)な傾向性—もある(p.43; p.51)。また、「おそらくは無制限に多種多様な形」で「現実化」されるものもある。たとえば、「ある物体が固い」という記述の意味は、「叩けば鋭い音を発するであろう」「強く接触すれば、われわれは痛みを感じるであろう」等々、数限りなくある。「ある動物が群居性動物であるという記述に含まれているすべての事柄を明らかにしたいと望むならば、われわれは異なる仮言的命題の無限系列を作り出さねばならないことになろう」。一般に、「人間の高次の [higher-grade—引用者注] 傾向性」は、後者のタイプの傾向性である (p.44; p.51、一部拙訳)。「高慢」や「信じている」ことなどは、「斉一的」に「現実化される」傾向性ではない (pp.44-45; pp.51-52)。「水が薄く危険であると信じている」ということは、「水が薄いと自分自身や他人に言いよらせる、他人によるそのような主張には黙って従う、それとは逆の主張に対しては反論する、水が薄く危険であるという命題から諸々の帰結を導き出すなどのことを躊躇なく行なう」ということである (pp.134-135; p.189、一部拙訳)。

「傾向 [tendency—引用者注] を述べる表現や能力を述べる表現」には、出来事の記述に使用し得ないものが多数ある。たとえば、「弾力的である」という「潜在的性質」が「現実化された」出来事の記述は、「その物体は引き伸ばされた後なので収縮しつつある」「突然の衝撃でつい今しがた撥ね返った」などである。それらの記述に、「弾力的である」という語は含まれない。デイスポジションの多様な「発現」の記述に用いられる語は、そのデイスポジションを「名指す」語とは異なる場合が多い (p.118; p.164、一部拙訳)。「傾向性的性質」を表す語は、実は「一般的な仮言的諸命題」の「省略的表現」である (p.85; p.113、一部拙訳)。(すなわちライルによれば、デイスポジション言明は、仮言的諸言明を概括するものである。)

デイスポジション言明は、「法則」に類似している。<sup>(20)</sup>「法則」は『可変的』variable』あるいは『開放的』open』な仮言言明であり、その条件節には「いかなる」であるときには「つねに」などの表現が含まれる (p.120; p.168)。デイスポジション言明は、「特定の物あるいは人間に言及」するので、「法則」そのものではない。しかしそうした言明は、「部分的に『可変的』[中略]ないし『開放的』」な仮言言明である点で、「法則」に類似している。「この眠っている人はフランス語を知っていると述べることは、たとえば、彼がいかなるときにフランス語で話しかけられても、あるいはいかなるフランス語の新聞を見せられても、フランス語で適切に対応し、適切に行為し、あるいはその新聞記事を母国語に正しく翻訳するであろうと述べることにほかならない」(p.123; p.172、一部拙訳)。

ライルのデイスポジション言明分析を概観した。次に、それに対する批判を検討しよう。

ハンブシャーは、次のように論じている。「殆どの人にとり、外部に現れる行動は、心的な活動・状態についての言明に関する最良の「中略」入手可能な証拠を成すことが多いので、そうした言明は行動に関する仮言言明と同一視されるようになる」。ライルも、「言明の意味」と「その検証の唯一の方法」を同一視し、従って「言明そのもの」と「その言明に関する十分な証拠と「中略」解釈されるであろうもの」を同一視している (Hampshire 1950, p.247)。しかし、この批判には疑問がある。ライルは、「理解」について次のように述べているのである。「あなたがこれこれのことをすることができ、しかじかであればそれをしたであろうということが、『あなたはそれを理解した』の意味の一部であり、あなたがそれを理解したかの判断材料は、そうした一般仮言言明の帰結節を満足する一連の行動である」(p.170、拙訳)。ギーチは、『心の概念』の中で「動揺」などに関する言明が仮言言明へと分析されていないことを指摘する。そして、それは、身体に関する言明は定言的であり心に関する言明は仮言的であるというライルの説と矛盾する、と述べている (Geach 1960, p.5)。しかし、前述のようにライルは、「身体」と「心」という二分法には依拠しておらず、身体に関する言明は定言的であり心に関する言明は仮言的であると論じているわけではない。また前述のように、ライルは「動揺」に関する言明を「出来事」に関する言明と把握しているので、それを仮言言明へと分析していないことは当然である。メリックスは、ルイスの議論に言及し、デイスポジションと仮言言明を結びつけるライルの考えを批判する。ルイス



の議論は、次のようなものである—ある「割れやすい」グラスを気に入った魔法使いが、それが叩かれたときには直ちに魔法をかけて割れないようにしようと決意する。この場合そのグラスは、「割れやすい」にもかかわらず、「叩かれたとしても割れない」(Lewis 1997, p.147)<sup>22)</sup>。メリックスによれば、この例は、「割れやすさに関するライルの条件的説明(conditional account)」に対する反例を成す (Merricks 2007, p.159)。

ルイスの議論には、しかし、疑問がある。魔法使いの決意の下で、そのグラスについて「叩かれれば割れる」という仮言言明は成り立たない。ライルの立場からは、この例で取り上げられているのは「割れやすい」グラスではなく、それが「叩かれたとしても割れない」ことに問題はないであろう。

仮にルイスの議論が妥当なものであるとしても、ルイスが批判するのは、「割れやすい」を「叩かれれば割れる」に還元するような「単純な条件分析」である—デイスポジションに関する「条件分析」一般ではない (Lewis 1997, pp.143-148)。ルイス自身、「改良された条件分析」を提示している (Lewis 1997, pp.149-158)。そして、実質的にはライルも、デイスポジション言明に対応する仮言言明をどのように精緻化するかに触れている。(第三節(一)を参照。)メリックスの批判の前提—ライルが「単純な条件分析」を採用しているという前提—には問題がある。

ライルのデイスポジション言明分析に対する批判を検討してきた。何れの批判も、説得力を欠いている。

さて、ライルによる「し得る」の語を含む言明(能力に関する言明)の分析には、「選択」との関係で、注目すべき点がある。

ライルは、「失敗や誤りを犯すことを避け得たであろう」の意味は、「正しく行う方法を知っていたにもかかわらず、あるいは正しく行う能力を持っていたにもかかわらず、その知識や能力を行使しなかった」である。その人物は「努力をしなかった、あるいは努力が足りなかった」と述べている (p.70; p.92、一部拙訳)。また、「できる」「ねばならない」等々の「様相語」について、次のように述べている。「もしならば」という語を含む文はほとんどの場合、様相表現を含む文に書き換えることが可能であり、またその逆も成立する。「もしならば」という語句と様相語句との間にはわずかに文体上の相異があるにすぎない」(pp.127-128; pp.177-178)。このように、「し得る」の語を含む言明は、一方で

知識・能力に関する言明へと、他方では仮言言明へと言い換え可能である、というのがライルの考えである。

「くし得る」については、それをへくしようを選択すれば、くするであろうと解釈する立場がある。<sup>(23)</sup>この立場に従えば、前述の「失敗や誤りを犯すことを避け得たであろう」に対応する仮言言明は、へ失敗や誤りを犯すことを避けようを選択したならば、それを避けたであろうである。また「フランス語を知っている」、すなわち「フランス語を使い得る」に対応する仮言言明は、へフランス語を使おうと選択すれば、フランス語を使うであろうである。しかしライルは、注目すべきことに、「フランス語を知っている」に対応する仮言言明の条件節に「選択」を含めていない。(前述の「いかなるときにフランス語で話しかけられても、あるいはいかなるフランス語新聞を見せられても」という条件節を参照。)何故であろうか。

ライルによれば、「いくつかの行為の道筋のうちの一つを選択する」ことは、それ自体、行為(「選択する」という行為)である (p.68; pp.88-89、一部拙訳)。従って、「くし得る」の語は、「選択」に付加可能であることになる。「くし得る」がへくしようを選択すれば、くするであろうを意味するのであれば、へいくつかの行為の道筋のうちの一つを選択し得るへいくつかの行為の道筋のうちの一つを選択しようを選択すれば、いくつかの行為の道筋のうちの一つを選択するであろうを意味することになり、さらにへいくつかの行為の道筋のうちの一つを選択しようを選択することにも「くし得る」が付加され、というように、無限背進が生じてしまう。ライルは、この点を考慮して、「くし得る」の語を含む言明に対応する仮言言明の条件節に「選択」を含めていないのである。実際ライルは、「意志作用」(volition)と「いくつかの行為の道筋のうちの一つを選択する」ことの同一視を批判する際、次のように述べている。「選択する」という行為自体がそれに先立った選択の結果生じたものであるということになり、これは無限に繰り返されることになる」という結果をもたらすような説は採用すべきでない (p.68; pp.88-89、一部拙訳<sup>(24)</sup>)。

最後に、モリスの、へ能力に関する言明くをへ仮言言明を含む言明へと分析する議論を取り上げよう。

モリスは、「力」を「活性化されるかもしれず、活性化されないかもしれないようなディスプレイ」(「条件的ディスプレイ」)と把握し、「随意に行使され得る力」を「能力 (ability)」と把握する (Morris 2002, pp.24-25)。そ

の上で、「能力」を「認識・知識に関わらない能力」「認識・知識に関わる能力」及び「認識・知識に関わる有効な能力」の三種に分類し、それぞれを「持つ」ことの分析を行っている。問題は、三種の能力を「持つ」こと何れの分析にも、「Wを行えばXが結果するようなW（Aの一連の基礎行為）が存在」する（<sup>26</sup>）という要素が含まれている点にある。「基礎行為」は、「他のことを行うことにより遂行される」のではない行為、あるいは「我々が行う別のことを通してではなく我々が行う」行為、とされる（Morris 2002, p.50）。<sup>27</sup>そして、行為者が「基礎行為」を「行おうととりかかる（選択する等）」ことにより「それを行い得る」ことは、「基礎行為の定義の一部」を成す、とされる（Morris 2002, p.65）。従って、「基礎行為」の概念に能力が含まれていることになる。「能力を持つ」ことに関するモリスの分析は、「能力」を含む「基礎行為」概念を用いることにより、循環したものとなっている。

本小節では、まず、ライルのデイスポジション言明分析を概観した。次に、それに対する諸批判は説得力を欠いていると論じた。最後に、能力言明に関するモリスの分析には問題があると指摘した。かくて、デイスポジションとしての政治的力に関する言明については、ライルに従い仮言言明に即して理解することに妥当性があるろう。

## 第二節 推論、半仮言言明

### （一）デイスポジションと「推論のための切符」

ライルによれば、デイスポジション言明は、「対象の「中略」行為や反応や状態を予測し、遡及的に推測し、説明し、変様させることをわれわれに許可する推論のための切符」である（p.124, p.173、一部拙訳）。ここでは、「予測」、「遡及的」な「推測」、及び「説明」に関するライルの記述を取り上げよう。（これらに比べ詳しい記述のない「変様させること」については、省略する。）

まず、「予測」と「遡及的」な「推測」についてである。

「ジョン・ドー氏はフランス語を知っているということを知るならば、彼がフランス語で書かれた電報を読んだとい

うことから彼がその意味を了解したと推論することを可能ならしめる追加的な切符をわれわれはもはやまったく必要としないのである。ジョン・ドー氏はフランス語を知っていることをわれわれが知っているということはわれわれがそのような切符をもっているということなのであり、また、彼がこの電報を理解するということをわれわれが期待するということとはわれわれがそのような切符を手にして旅行することにほかならない」(p.125; p.174、一部拙訳<sup>28</sup>)。この例に見られるのは、「ジョン・ドー氏はフランス語を知っている」というデイスポジション言明(「推論のための切符」)を用いた、彼は「この電報を理解する」であろうという「予測」である。また、彼は「その意味を了解した」であろうという「遡及的」な「推測」である。

次に、「説明」についてである。

ある対象を中心とする出来事を「説明」する方法は、二つある。第一は、その出来事の原因たる出来事を特定することである。第二は、その対象について成り立つ「一般的な仮言的命題」を特定することである。たとえば、石があたったのでそのグラスは砕けたという説明は、前者の方法を用いている。そのグラスは砕けやすいので(石があたったとき)砕けたという説明は、後者の方法を用いている。『砕けやすい』ということばは傾向性的形容詞である。すなわち、そのグラスは砕けやすいと述べることはそのグラスについてある一般的な仮言的命題を主張することにほかならない」(pp.88-89; p.118、一部拙訳)。

ある人物が「見知らぬ人に出会ったときに自分の自慢をした」ことを説明する際、その人物に「虚栄心」があると述べることは、「他人の称賛や羨望を得る機会があるときにはつねに彼はその称賛や羨望を生じさせると彼が考えるようなことは何でも行なう」という仮言命題を述べることである。「ある特定の行為の動機<sup>29</sup>をある人に帰属させるということは、われわれには見えない出来事の原因として推論するということではなく、出来事を表わす命題を法則類似命題の下へ包摂するということなのである」(pp.89-90; pp.119-120、一部拙訳)。

「見知らぬ人に出会ったときに自分の自慢をした」ことについて「虚栄心」にてらして行う説明が、先述の第一の説明方法を適用しているのであれば、それは「彼の自慢の原因は彼の中における虚栄という特殊な感情ないし虚栄をはりた

いという衝動の生起であった」という説明であることになる。そうした説明が行われても、「動機の帰属が正しいか否か」ということは直接にはテストすることができず、したがって思慮分別のある人であれば、そうした帰属は信頼しないということになるであろう。しかし、「われわれは実際に他人の動機を見出している」。「他人の動機を見出す過程」は帰納的な過程、もしくはそれに類する過程であり、その過程を通じ、われわれは法則類似命題を確立し、その命題を特定の行為の『理由』として適用するようになる」(pp.89-90; pp.119-130、一部拙訳<sup>30</sup>)。

ライルのこのような「説明」論に対し批判が加えられているので、それを検討しよう。

ライオンズは、その『ギルバート・ライル』というタイトルの著書 (Lyons 1980) で、次のように論じている。『心の概念』は「デイスポジションの発生論的 (genetic) 説明」(「デイスポジションが―引用者注〕存在論的にいかなるものであり、どのように発生するかの説明」) を示している、とライルは考えているようである。<sup>(31)</sup>しかし実際には、同書は、「デイスポジションの意味論的説明」(「デイスポジション」という語が何を意味するか、あるいは言語的にどのように使用されているか」の説明) を示すにとどまっている。すなわち、「XはデイスポジションYを持つ」は、「状況Cが生ずるときはいつでも、XはY、あるいは―Yというタイプに属すると言い得る―M、N、O、Pという様々なこと、を行う」<sup>(32)</sup>を意味する、と述べるにとどまっている。そのため、たとえば、グラスが落とされて割れたという出来事について、そのグラスの割れやすさにてらした説明が行われることになる。しかしそうした説明は、そのグラスは落とされれば割れるから落とされたとき割れた、と述べるに過ぎず、「割れないグラスを作る」のに役立たない。「因果的要因」に着目していない―「デイスポジションの発生論的説明」を示していない―ライルのデイスポジション論に基づく出来事説明は、「擬似的」なものである。「デイスポジションの発生論的説明」の一例は、「船酔いしやすいこと」の、「内耳の液体の平衡失調」という因果的要因にてらした説明である (Lyons 1980, pp.49-51)。

ライオンズの批判は、ライルのデイスポジション論は「因果的要因」に着目していないという指摘、また、ライルのデイスポジション論に基づく出来事説明は「擬似的」なものに過ぎないという指摘から成る。

前者の指摘に類することは、他の論者によっても述べられている。デイスポジション言明にライルが対応させる仮言

言明には、人あるいは物の「内在的性質」への言及がない (Harré and Madden 1975, pp.85-86, 89-90)。<sup>7</sup> ライルの議論においては、「信念」というデイスポジションの「基盤」が考察されておらず、「信念」は「催眠力」と同じように「謎生成的 (mystery-making)」である (Levi and Morgenbesser 1978/1964, p.404)。<sup>8</sup> 「信念」の多様な「顕在化」を引き起こす「状態」に、ライルは着目していない (Armstrong 1973, pp.17-18)。<sup>9</sup> 出来事をデイスポジションにてらして説明するというライルの議論に従えば、自然科学者は、磁化された鉄片と磁化されていない鉄片の間の「実在的な違い」を探求するのではなく、単に「鉄片に対し一定のことが為されれば、一定の仮言言明が正しくなる」と言えばよいことになる (Geach 1960, p.6)。<sup>10</sup>

最後に挙げたギーチ (Geach 1960) の批判に対し、プレースは、次のような説得力のある反論を行っている。確かに、グラスの「割れやすさ」やアヘンの「催眠の性質」を説明するには、グラスの「分子構造」やアヘン及び脳の「分子構造」に言及することが必要である。しかしライルが論じているのは、「デイスポジション言明の意味」及び「デイスポジション言明」を用いて何を説明し得るかであり、「何が、デイスポジション言明そのものが記述する事実を説明するか」ではない。後者の解明は、「科学」の課題である (Place 1999, p.384)。<sup>11</sup> プレースの反論は、デイスポジション言明の正しさを支える要因を取り上げていないというライル批判一般に対する反論を成していよう。

後者の指摘に類することも、他の論者によつて述べられている。ホフシュタッターによれば、電線が電気を通すことは、電線に電気を通す傾向があることや電池に電流を生じさせる傾向があることから説明される、というのがライルの議論である (Hofstadter 1951, p.268)。<sup>12</sup> ギーチは、ライルの考える行動説明を、「アヘンは、催眠力 (dormitive power) を持つので、人を眠らせる」という説明と同じ水準のものとして評している (Geach 1960, p.5)。<sup>13</sup> なおモリスも、ライルの「説明」論には言及していないが、以下のように論じ、政治・社会現象の「説明」というコンテクストで「力」は有効な概念ではないとの結論を下している。カップを床に落とすとしてそれが割れたことの、そのカップの「割れやすさ」というデイスポジションにてらした説明は、我々を納得させないであろう。「割れやすい」ということは、「そのように落ちれば割れる」ということである。そのように落ちてカップが割れるのを見た我々は、「カップが割れやすかったことを知ってい

る。「何故カップが落とされたのか」あるいは「一体何故その種のカップは特に割れやすいのか」が、我々の知りたいことである。デイスポジションにてらした上記の説明は、「それが床に落ちて割れたのは、偶然ではなく、いかなる点でも異常なことではなかった」と述べるに過ぎない。しかし、「割れやすさ」は、「予測」を行う上では有効性を持つ。そのカップは落とせば割れると知っていれば、我々はそれを注意深く扱うであろう。一般に、「能力及び力に関する言明」は、予測には有用であるが、説明には有用でない (Morris 2002, pp.43-44)。

出来事を説明する上で仮言言明は有効でない、という議論を取り上げてきた。そうした議論は、しかし、ある対象を中心とする出来事、その対象、あるいはその出来事発生時の状況について、情報が豊富であることを前提しているのではない。グラスやカップが割れたときの状況について、強引に割られたのではない等々、情報が豊富にあるときには、割れやすさにてらした説明は有効でない。しかし、グラスやカップが割れたことだけが知られている場合、それが割れやすいから割れたという説明も、割れにくいにもかかわらず強引に割られたという説明も、成り立つ余地がある。複数の説明があり得る際、割れやすさにてらした説明も有効性を持つのではない。人がアヘンの吸引をはじめ様々な行為を行ったこと及びその後眠ったことは知られているが、アヘンの性質は全く知られていないのである。アヘンは、催眠力を持つので、人を眠らせる」という説明は空疎なものではないであろう。ある人物が「見知らぬ人に出会ったときに自分の自慢をした」場合、その人物が自慢をする様子、そのときの状況、あるいはその人物の普段の行動様式について情報が豊富であれば、「虚栄心」にてらした説明は有効性を持たないかもしれない。しかし、「見知らぬ人に出会ったときに自分の自慢をした」ことだけが知られているのであれば、「虚栄心」にてらして行う説明も、何らかの計算に基づいていたという説明も、成り立つ余地がある。複数の説明があり得る際、「虚栄心」にてらした説明も有効性を持つであろう。

以上、ライルの「説明」論に対するライオンズらの批判に問題があり、「能力及び力に関する言明」は説明には有用でないというモリスの議論にも問題がある、と指摘した。しかしモリスは、「そもそも我々は何故『力』を使用するのか。力の概念にどのような仕事をさせたいのか」という問いを立て (Morris 2002, p.36)、「能力概念が有用性を持つコンテ

クストについて重要な議論を展開している。

モリスによれば、能力概念は、「実践的」「道徳的」「評価的」の三つのコンテキストで有用性を持つ。

「実践的コンテキスト」で提起される問いは、「私は何を為し得るか」「あなたは私のために何を為し得るか」「あなたに私に対して何を為し得るか」である (Morris 2002, p.46)。たとえば、買収者は、相手が買収者の望むことを確実に行う能力を持つかを問うであろう。この場合の能力は、「認識・知識に関わる有効な能力」である。また、兵器の偶発的爆発を危惧する者は、兵士が誤って爆発事故を引き起こす能力を持つかを問うであろう。この場合の能力は、「認識・知識に関わらない能力」である (Morris 2002, pp.54-55)。

「道徳的コンテキスト」で提起される問いは、「あなたはそれ(たとえば犯罪)を為し得たか」「あなたはそれ(たとえば災害)を防ぎ得たか」である (Morris 2002, p.46)。殺人の罪に問われた者が行う最も有効な弁明は、被害者を撃つことは自分の射撃技術の不足のため不可能だったというのではなく、被害者を撃つことは根本的に自分の能力を超えることだった(被害者を撃つという結果をもたらすような自分の基礎行為は、存在しなかった)というものである。この場合の能力は、「認識・知識に関わらない能力」である。また、(消火器を備えた)ビルの火事を防がなかった者が行う有効な弁明は、消火器があることを知らなかったので火事を防ぐ能力を持たなかったというものである。この場合の能力は、「認識・知識に関わる能力」である (Morris 2002, pp.54-55)。

「評価的コンテキスト」で提起される問いは、「このでの力の分布と量は、どの程度妥当なものか」である (Morris 2002, p.46)。評価の対象は、行為者ではなく、「社会」「社会システム」である。評価の基準は、それらが「市民に他者の力からの自由を与える度合い」及び「市民が自分の必要あるいは欲求を満たす力を持つ度合い」である。前者の度合いが高くて、後者の度合いが高いとは限らず、両者は区別されなければならない。前者の度合いが低ければ、市民は「支配されている」。後者の度合いが低ければ、市民は「無力である」 (Morris 2002, pp.xiv, 40-41)。

能力概念―従って能力言明―が有用性を持つコンテキストに関するモリスの議論を概観した。<sup>(35)</sup>能力言明に関するモリスの理解に問題があることは、前述の通りである。能力言明に関するライルの理解を前提した場合にも、これらのコン



テキストを設定可能であるか、またこれら以外のコンテキストも設定可能であるか、についてさらに検討が必要であろう。

本小節では、デイスポジション言明を「推論のための切符」ととらえるライルの議論を紹介した。また、ライルの「説明」論に対する諸批判には問題があると論じた。さらに、能力概念が有用性を持つコンテキストを示そうとする、モリスの注目すべき議論を取り上げた。デイスポジションとしての政治的力に関する言明を「推論のための切符」として扱うという視点、また、そうした言明を用いるコンテキストを明確にするという視点、は重要なものと言えよう。

## (二) 半仮言言明

ライルは、出来事記述と仮言言明の両者を含む、複雑な種類の言明があると指摘している。

「鳥が―引用者注」アフリカの方向へ飛んで行く」は、出来事の記述である。「渡り鳥である」は、デイスポジションの記述である。これらに対し、「渡っている」は、「渡り鳥である」というデイスポジションに言及しつつ出来事を記述している (p.142; p.200)。

「最終列車に乗り遅れたのは、いかにも君らしい」という非難には、「部分的に満足された開放仮言言明」が含まれている。「最終列車に乗り遅れた」ことにより部分的に満足された「開放仮言言明」とは、彼は「最終列車」に乗ろうと思っただのであれば、「乗り遅れた」であろう、「彼は、公衆電話ボックスに行ったのであれば「中略」必要な小銭がなかったであろう」、「彼は、手紙を投函しようと思ったのであれば「中略」最後の回収の時刻に間に合わなかったであろう」等々を一括したものである。従って、この非難は、その人物が乗り遅れたことが「予想され得た種々のことのうちの一つに過ぎない」と述べていることになる。「君がそういうことをしたのは、いかにも君らしい」のような言明は、「半仮言言明」な言明あるいは「雑種の定言言明」である (p.141、拙訳<sup>37</sup>)。

「半仮言言明」な言明は、「ある点においては生の事実 brute fact に関する言明に似ているが、他の点においては推論許可証に似ている」。それは「叙事的であり、説明的であり、条件付きで予測的」である。「定言言明の例として通常

挙げられるもの多く」は、実は半仮言的なものである (p.141; pp.199-200)。

半<sub>1</sub>仮言言明は、出来事の説明に用いられ得る。「なぜその鳥は南へ飛んで行くのか」という問いに対する答えとして、「それは渡っているからである」は適切なものである。この答えは、その鳥が南へ飛んで行くという出来事を、半<sub>1</sub>仮言言明を用いて説明している。「渡るといふ過程は南へ飛んで行くといふ過程と異なる過程ではない」。従って、前者が後者の原因を成すわけではない。また、「渡っている」はデイスポジション記述ではない。半<sub>1</sub>仮言言明に基づく説明は、原因を特定する説明とも、デイスポジションを特定する説明とも異なっている (p.142; p.201)。<sup>(38)</sup>

ライルの「半<sub>1</sub>仮言言明」論に対する批判を検討しよう。

言明を、出来事を記述する言明と仮言言明に分類するのであれば、仮言言明を含む出来事記述というカテゴリーを設定するのは妥当でない、という批判がある (Wright 1959, p.9)。ライルは「その鳥は渡っている」を「出来事の報告」と呼んでいる (p.142; p.201、一部拙訳) ので、この批判は妥当性を持つように見える。ライルは、しかし、次のようにも述べている。「定言的であるかあるいは仮言的であるかのいずれか一方」という論理学者の対比には多少誇張があると考えるべきである。むしろここではこの対の間に存在する深い亀裂に架橋する作業をまさに行なうような言明の集合を扱うべきなのである」(p.140; pp.198-199)。(この後に、先に引用した、「半<sub>1</sub>仮言的」な言明は「叙述的であり、説明的であり、条件付きで予測的」であるという箇所 (p.141; pp.199-200) が続く。)従って、ライルの「半<sub>1</sub>仮言言明」論において設定されているのは、叙述・説明・予測の各側面を持つ言明というカテゴリーであり、仮言言明を含む出来事記述というカテゴリーではない、と解釈し得よう。

また、出来事記述と仮言言明の区別自体に関する次のような批判もある。ライルは、定言言明の例として「ジョン・ドローはフランス語を話している」を挙げる。しかし、これは半<sub>1</sub>仮言言明である。この言明には、「もしxがフランス語を理解し、ジョン・ドローの話しを注意深く聴いていれば、xがジョン・ドローの言っていることを理解している蓋然性は高い」という仮言言明が含まれるからである。純粹な定言言明の例を挙げることはできない。従って、叙述と推論許可の区別 (ライルが強調する区別) も成り立たないことになる (Hofstadter 1951, p.266)。<sup>(39)</sup> 仮に、純粹な定言言明の例を

挙げることはできないという主張が正しいとすれば、ライルが「叙述」を例示しているのは妥当でないということになる。しかし、そのことから、叙述と推論許可の概念的区別自体が成り立たないということにはならないであろう。この批判自体、(そうした区別を前提する)半・仮言言明というカテゴリーが成り立つことを認めている。

本小節では、ライルが出来事記述・説明・予測の各側面を持つ半・仮言言明というカテゴリーを設けていることを確認した。ライルに従えば、政治的力の「行使」「掌握」等々に関する言明(「はじめに」を参照)は、半・仮言言明であり、仮言的諸言明を概括した言明に出来事記述を組み合わせたものへと分析し得よう。

### 第三節 課題と含意

#### (一) 仮言言明の精緻化

デイスボジション言明に対応する仮言言明については、それをどのように精緻化するかという課題がある(Choi and Farra 2014を参照)。ライルの議論には仮言言明の精緻化に関わる部分があるので、それを取り上げよう。

前述のようにライルは、「この眠っている人はフランス語を知っている」という言明を、たとえば「彼は、いかなるときにフランス語で話しかけられても、あるいはいかなるフランス語新聞を見せられても、フランス語で適切に應對し、適切に行為し、あるいはその新聞記事を母国語に正しく翻訳するであろう」という言明へと分析している(第一節(二)を参照)。またライルは、「たとえば彼が眠気を催しているとき、上の空のとき、酔っているとき、あるいは恐慌状態にあるときなどに彼が適切に反応しないのを見たというだけの理由で、彼はフランス語を知っているというわれわれの言明を撤回すべきではない」と述べている(pp.123-124; p.172)。

こうした議論を手がかりに、デイスボジション言明に対応する仮言言明の精緻化について考えよう。「眠気を催している」等々の場合に着目して、いかなるフランス語新聞を見せられても、その新聞記事を母国語に正しく翻訳するであろう」を精緻化すれば、いかなるフランス語新聞を見せられても、眠気を催しておらず、上の空でなく、酔っておらず、

恐慌状態に陥っていないのであれば、その新聞記事を母国語に正しく翻訳するであろうとなる。要するに、へいかなるフランス語新聞を見せられても、平常状態にあれば、その新聞記事を母国語に正しく翻訳するであろうである。

デイスポジションに関わる仮言言明には、「注意を払う」という要素を含めることも必要であろう。ライルは、ある少年が「本結びの結び方を知って」いるにもかかわらず「本結びのかわりに立結びを結んでしまった」というケースについて論じている。「彼はこのロープで本物の本結びを結ぶことができ、自分の行なっていることにいつそう注意を払っていたならば、この場合においてそれを結んでいたのである。かの失敗は彼がその結び方を知っていたにもかかわらず正しく結ばなかったがために彼の責任とされたのである」(p.71; pp.93-94 一部拙訳)。(この議論を敷衍すれば、次のようになる。その少年について「彼がこのロープで本物の本結びを結ぶことを求められるなどの場合、十分な注意を払うならば、本物の本結びを結ぶであろう」という仮言言明が成り立っていたが、彼は十分な注意を払わなかったため、それを結ばなかった。それ故、彼の失敗について、自分に責任があるとされた。)ライルは、実質的に、能力に関わる仮言言明に「注意を払う」という要素を含めている。この要素及び平常状態に着目すれば、「フランス語を知っている」に対応する一つの仮言言明は、へいかなるフランス語新聞を見せられても、平常状態にあれば、かつ自分の行っていることに十分な注意を払えば、その新聞記事を母国語に正しく翻訳するであろうである。

以上、平常状態及び注意を払うことに関するライルの議論を取り上げた。ライルは、それらをデイスポジション言明に対応する仮言言明に導入する―そうした仮言言明を精緻化する―余地があると認めている、と言えよう。

デイスポジション言明に対応する仮言言明の精緻化との関連で、「能力」と「機会」の区別に関するライルの議論も取り上げよう。ライルによれば、登校する少年が普段のように家を出てバスに乗ったにもかかわらず、バスの故障のため遅刻した場合、その少年に責任はない。彼には始業に間に合うよう登校する「能力」はあったが、当日その能力を發揮する「機会」が欠けていた(p.72; pp.94-95)。また、注意不足のため少年が立結びを結んでしまったというケースについて、ライルは「彼の手には外的強制力が加えられていなかった」「彼が正しく結ぶのを妨げるようなことを行なっていた人は誰もいなかった」と述べている(p.71; p.93)。この場合は、少年にその「能力」を發揮する「機会」があったという

ことになる。

ライルは、「機会」をどのように概念化すべきかという点については論じていない。しかし、この点は重要である。あの要素が「機会」に含まれれば、それはデイスポジション言明に対応する仮言言明には含まれないことになる。デイスポジション言明に対応する仮言言明をどのように精緻化するかは、「機会」の概念に影響されるのである。

「機会」の概念化に関連する議論を、モリスが展開している。

モリスによれば、能力言明の「分析」を成す条件文と、能力言明を「より正確」にする条件文は、区別されなければならぬ。「ここに本があれば、私はそれを読むであろう」は、前者の例である。「十分な光があれば、私は読み得る」は、後者の例である。「十分な光があれば」は、「私の読む能力」に対する「制約」を述べている (Morris 2002, pp.61-62)。こうした議論に従えば、「機会」は、能力言明を「より正確」にする条件文の条件節で表現されるということになる。

モリスの議論には、しかし、問題がある。「十分な光があれば」を「私の読む能力」に関する分析の一部とする見解も、成り立ち得るのではないか。(たとえば、ここに本があれば、そして十分な光があれば、私はそれを読むであろう)を、能力言明の分析を成す条件文ととらえ得るのではないか。)そうした見解を排除する理由を、モリスは示していない。「機会」概念を明確化する上では、二種の条件文の区別についてさらに検討することが必要である。

本小節では、ライル及びモリスの議論を取り上げつつ、デイスポジション言明に対応する仮言言明の精緻化という課題があること、また、そうした精緻化は「機会」概念の明確化を伴うこと、を指摘した。デイスポジションとしての政治力に関する言明の、仮言言明(あるいは半仮言言明)への分析には、解決すべき課題がある。

## (二) デイスポジション概念の機能

「虚栄心」に関するライルの分析において、虚栄心があるに対応する仮言言明に、「虚栄心」の語は含まれていない。仮言言明に含まれているのは、「他人の称賛や羨望を得る機会」「称賛や羨望を生じさせると彼が考えるようなこと」

などの語句である(第二節(一)を参照)。「虚栄心」の語は、仮言的諸言明を「省略的」に表現するために用いられるに過ぎない(第一節(二)を参照)。

以上を一般化すれば、次のようになる―デイスポジション言明は仮言的諸言明を概括したものであり、それら仮言的諸言明にデイスポジション概念は含まれない。このことの一つの含意は、デイスポジション概念は何らかの対象を指示する機能を持たず、従ってデイスポジション言明はデイスポジションという対象に関する言明ではない、というものであろう。<sup>(40)</sup>

ライルについて論じた文献で、こうした含意に言及しているものを、発表された順に挙げよう。但し何れも、デイスポジション概念が仮言的諸言明を「省略的」に表現するために使用されるというライルの議論には、着目していない。ライルによれば、「デイスポジション」文が存在物(entities)の存在あるいは出来事の生起を主張していると考えるのは、誤りである。「デイスポジション」は、「存在物」ではなく(Hofstadter 1951, p.265)。

デイスポジションを心的原因と取り違える、あるいは仮言言明を定言言明と取り違える―ライルが批判する―誤りは、「修飾表現」を「指示表現」と取り違える誤りである(Bestor 1979, pp.236-237)。

ライルは、「心的行為語の意味に関する非表示的(non-denotational)理論」に依拠していた。彼によれば、「心に関する文の意味は、そうした文を構成する心的行為語による表示の関数ではない。心に関する文「中略」を構成する語は、表示のためのものではない」(Park 1994, pp.267, 282)。

心的な語に関するライルの立場は、「非指示論(irreferentialism)」である。彼によれば、「心的な語は何かを指示するように機能する、と考えたいという誘惑」に抵抗すべきである。「デイスポジション語」は、「指示的」なものではなく、「推論のための切符」の一部分である(Rey 1997, pp.141, 152)。

『心の概念』の中でライルは、「知識」「意志」「感情」「記憶」など、「伝統的に名詞化されてきた述語(及び発話のその他の部分)」を利用している。しかし彼によれば、それらの語は、「文の主語の位置」に置かれ「議論の焦点」となるときは、「勤務していない(off duty)」。『述語(及び発話のその他の部分)』が「勤務している(on duty)」のは、

「無生物あるいは生物」が「文の主語の位置」に置かれるときである (Place 1999, pp.375-376)。

「心的概念の対象は「心身二元論の考えに反し—引用者注」実はデイスポジションであると示す」ことは、ライルの議論とは無縁である。「能力」という語は、「もの」を「表す」ことに基づいて、意味を持つのではない。彼の議論から、「能力」という語に対応する「存在論的なもの (itens)」に対するコメントは生じない (Livingston 2004, p.253 n.32)。

ライルの議論に、「心的概念の対象は、実際は何であるか」についての考察は含まれない。彼の議論が示すのは、能力・知識など、「デカルト主義的な理論家が存在すると言うようなものの存在を、我々は信ずる必要はない」ということである (Livingston 2004, pp.125, 253 n.32)。

「物の力」は「物に何が起こるか、何が起こり得るか、に関する事実」に還元される、という「因果的ノミナリズム」の考えは、ライルのデイスポジション論に類似する (Whittle 2009, p.268)。

ライルにとり、デイスポジション言明に対応する仮言言明(たとえば「この角砂糖は、水に入れられれば溶ける」)は、物に性質を帰属させる言明ではない (Bird 2012, p.733)。

以上、ライルの議論の—前述の—含意に言及する文献を紹介した。

さて、ライルは一見そうした含意と整合しないことも述べている。行為は、「力や傾向」の「行使」である (p.51, p.62)。ある人の行為が知的なものであるかを判断するにあたり、我々は「行為そのものを超えてそれ以上のものを見る」。すなわち、「行為をその一つの現実化としてもつ彼の能力や傾向を考察」する (p.45; pp.52-53)。「推論能力」は、「論理学者の公式を暗誦することではなく、むしろ実際に妥当な議論を構成し誤謬を発見することにおいて示される [exhibited—引用者注]」(p.49; p.58、一部拙訳)。こうした議論においては、「行使」「現実化」の対象としての、また「示される」対象としての、力あるいは能力が提示されているかの如くである。

ライルは、しかし、以下のようにも論じている。

「傾向語」を含む文を、仮言的あるいは半仮言的な言明ではなく「目撃不可能な事実の定言的な報告」と解釈するの

は、誤りである。「力」(force)の語を「隠れた、力を働かせる作用因を表わす」[denoting an occult force-exerting agency]ものとして扱う誤りは、自然科学においてはもはや見られないが、数多くの心の理論においては未だに見られる(p.117; p.162<sup>7</sup> 一部拙訳)。

能力や傾向について語ることに対し、次の批判がある。「潜在性」は、「現実的」なものではない。「世界には現に存在するものと生起することのみが含まれている」のであり、「潜在性」は含まれていない。―これは、能力等に関する言明(たとえば「この眠っている人はフランス語を読むことができる」)が事実(「存在するもの」や「生起すること」)に関する事実とは別種の事実)を主張しているという考えに対する批判としては、妥当性を持つている。「傾向語」を「隠れた作用因ないし原因―すなわち、一種の地獄の辺土のような世界 limbo world に存在するものないしはそこにおいて生起する過程―を表す」語と解釈していたかつての諸理論は、確かに誤っていた。「『ひきまらであろう』could' 『もし……ならば……であろう』would ……if……』というような語を含む文」は、「事実を報告する」わけではない。しかしそうした文に、行うべき仕事がないわけではない。そうした文が行う仕事は、「法則」が行うそれに類似している(pp.119-120; pp.165-167<sup>7</sup> 一部拙訳)。

かくて、ライルは―力あるいは能力の「行使」等々について語る場合においても―力あるいは能力という対象は提示していない、と解釈することは可能であろう<sup>(4)</sup>。

ライル批判・理解には、ライルの議論におけるデイスポジション概念の機能について誤解しているものがある。

アームストロングによれば、デイスポジションは、それを顕現させる状況が存在しない場合でも人や物に帰属させ得る。然るにライルは、デイスポジションの基礎を成すような「カテゴリーカルな状態」は存在しないと主張している。ライルの主張に従えば、デイスポジションを顕現させる状況が存在しないとき、それを人や物に帰属させる根拠はどこにも見出せないことになる。同じ人・物でも、そのデイスポジションは変化する可能性があるからである (Armstrong 1968. pp.85-87)。この批判の中で、デイスポジションの変化・顕現が言及されている。変化し顕現するのは、デイスポジション概念の指示対象であろう。アームストロングのライル批判は、デイスポジション概念が指示的機能を持つとい



う前提に基づいている。

ショルツ及びオルストンのライル批判は、概念の特徴と概念の指示対象の特徴は相異なるので、前者に基づいて後者を明らかにすることはできない、というものである (Scholz 2009, pp.134-138; Alston 1978/1971, pp.367-368, 380-381, 383)。たとえば、多くの人にとり、「電流」概念には「壁のソケットから出てくる何か」という要素が含まれている。しかしそうした要素から、電流の本性を把握することはできない。デイスポジション概念についても同様である。ライルは、「技能」概念が「出来事」概念として機能しないことから、技能は出来事ではないと主張する。しかし、「技能」概念の特徴から技能の特徴を把握することはできない (Scholz 2009, pp.136-137)。また、「ミスが選挙に勝つ」というジョーンズの信念 (belief) のような「指示的表現」は、仮言命題に還元できるかもしれない。しかしそうした表現の指示対象には、仮言命題からは想定し得ない性質 (たとえば、内的・私的な出来事であるという性質) が含まれ得る。「言語表現に指示される存在物は、その表現の意味に反映されていない性質を数多く持つことがあり得る」 (Alston 1978/1971, p.383)。これらの批判においても、デイスポジション概念は指示的機能を持つと前提されている。

プライアーによれば、ライルの「あるデイスポジションナルな性質を持つ」ということは、特定の状態にある、あるいは特定の変化を被るということではない (p.43, 拙訳) という文について、通常次のような (妥当な) 理解が為されている。「我々が特定のデイスポジションを帰属させる物の内的性質」は、「我々がそのデイスポジションを帰属させない物の内的性質」と全く同じであり得る (Prior 1985, pp.30-31, 40)。これは、「デイスポジションナルな性質」という対象の存在を前提し、ライルは、そうした対象は物の状態・変化と結びつかないと述べている以上、そうした対象の存否と物の (その状態・変化と結びつく) 「内的性質」の間には関連性がないと主張していることになる、という理解であろう。レイは、「信じていること」(信念) に関するライルの分析 (第一節 (二) を参照) を取り上げる。そして、発話は、「自分の信念を表現しよう」という意図」に基づくときにのみ、「自分自身や他人に言いよせさせる」等々の行為になる (ライルの議論は循環している) と批判する (Rey 1997, pp.151-152)。この批判も、「表現」される「信念」の存在を前提している。

幾つかのライル批判・理解を取り上げてきた。何れも、ライルの議論におけるデイスポジション概念は指示的に機能していると前提しており、それ故説得力を欠いている。

本小節では、ライルの議論の―デイスポジション概念の機能に関する―含意について論じた。また、そうした含意を見落としたライル批判・理解も為されてきたと指摘した。ライルに従えば、デイスポジションとしての政治的力という概念は、指示的機能を持たないものとして扱うべきであろう。

## 結び

本稿では、ライルのデイスポジション論、それに対する諸批判、及びモリスの議論の検討を行った。そうした検討により、以下の諸点を示した。すなわち(1)デイスポジション概念を用いた言明は仮言的諸言明(推論のための切符)を概括したものであるとライルが主張していること、(2)そうした主張の一つの含意は、デイスポジション概念は指示的に機能しないということであること、(3)ライルが半―仮言言明というカテゴリーを提出していること、(4)ライルのデイスポジション論に対する説得力ある批判は見あたらないこと、そして(5)モリスは能力概念が有効性を持つコンテキストについて重要な議論を展開しているが、能力言明に関するモリスの分析には問題があることである。

以上から、次の結論を得る。着目すべきは、デイスポジションとしての政治的力という対象ではなく、その概念である。デイスポジションとしての政治的力の概念は、仮言的諸言明、あるいは仮言的諸言明それぞれに出来事記述を組み合わせたものを、を概括する言明中―指示的に機能しないものとして―位置づけられるべきである。

この結論を踏まえ、「はじめに」で取り上げた問題に答えよう。〈力を保持する〉等々は、「力という語の指示対象を保持する」等々を意味していない。力の語が「保持」「分布」などと結びつけられている言明は、仮言的諸言明への分析を必要とする。また、力の語が「行使」「發揮」「現実化」「誇示」「獲得」「掌握」「喪失」「継承」「均衡化」などと結びつけられている言明は、仮言的諸言明を概括した言明に出来事記述を組み合わせたものへの分析を必要とする。前記の

問題にこのように答えることは、「力」をめぐる抽象的な指示的に機能しない「力」概念を用いる点で抽象的なディスコースの具体化という意義を持つと考える<sup>(43)</sup>。

次のような議論がある。ライルが述べるように「人間の高次の傾向性」が「おそらくは無制限に多種多様な形」で「現実化」される<sup>(44)</sup>のであれば、「くする方法を知っている」という言明にいかなる仮言的諸言明が対応するかを正確に把握することは不可能となり、ある人物が「くする方法を知っている」か否かは判断不能になってしまう (Williams 2008, p. 22)。しかし問うべきは、その人物が「くする方法を知っている」か否かではなく、その人物についていかなる仮言言明が成り立つかである。デイスポジションとしての政治的力に関する言明にいかなる仮言的諸言明が対応するかも正確には把握し得ないが、問うべきは、個人あるいは集合的行動主体 (組織など) についていかなる仮言言明が成り立つかである。(集合的行動主体についていかなる仮言言明が成り立つかを判断する場合は、その実体化を避けること―集合的行動主体の構成員の行動) が集合的行動主体の行動<sup>(45)</sup>と認識される仕組みを明示すること―が前提である。)

哲学の分野で展開されているデイスポジション論<sup>(45)</sup>の一つの焦点は、デイスポジションの条件分析の可否である。これに関する論議は、条件分析を受け入れ可能なものにするため、それをどのように精緻化すべきかという点に及んでいる。本稿においては、ライルの議論に対する直接の批判のみを取り上げた。しかしデイスポジションの条件分析に対する批判には、ライルの議論に言及していかないが、実質的にはそれに対する批判を成すものがある。そうした批判の検討、またデイスポジションの条件分析をどのように精緻化すべきかの検討は、今後の課題である。

#### 注

(1) 本稿においては、力という語を権力、勢力、影響力、指導力等々の総称として扱っている。権力等々それぞれについて、多様な理解がある。本稿では、特定の理解を前提せずに力を主題化した上で、力をデイスポジションととらえる考え方に着目する。

(2) 正確には、仮言言明の集合あるいは半仮言言明、である。後者は、第二節(二)で取り上げる。

(3) 同書は、二〇〇二年にデネットの序文 (Dennett 2002) を付して、また二〇〇九年にタニーの序文 (Tanney 2009c) を付して、

再刊されている。(なお一九七一年に刊行されたライルの論文集が、二〇〇九年にタニーの序文 (Tanney 2009a, 2009b) を付して、再刊されている。) 本稿で同書から頻繁に引用するが、訳のほとんどは、坂本百大・井上治子・服部裕幸訳『心の概念』(みすず書房、一九八七年)によっている。引用の際、原著と同訳書のページ番号を併記した。筆者が訳した場合、あるいは同訳書の訳文の一部を筆者が変更した場合は、その旨記した。

同訳書で disposition は「傾向性」と訳されているが、本稿ではデイスポジションの語を用いる。「傾向性」は、「傾向」や「性向」に類似した意味を持つと受け取られ得るからである。(後述するように、ライルの議論における disposition は、発揮されたことがなく発揮されそうもない「能力」を含んでいる。) 但し、同訳書の訳文を使用する際、訳文中の「傾向性」はそのままにしてある。

(4) 『心の概念』の目的は、心身二元論という「神話」を批判することにある (Ryle 1949, p.8; pp.2-3) (pp.2-3 は訳書のページ番号である。注3を参照)。ライルのデイスポジション論は心身二元論批判の中に位置づけられているので、その内容を確認しよう。(ライルの哲学全般については、Tanney 2009c を参照)。

ライルによれば、心身二元論という「神話」において、「身体的なものと心的なものとの間の差異は『もの』『素材』『属性』『状態』『過程』『変化』『原因』『結果』などというカテゴリーから成る共通の枠組みの中における相異として説明された」(Ryle 1949, p.19; p.16、一部拙訳)。しかし、「一方においてある一つの種類の實在としての心的状態あるいは心的過程が存在し、また他方において他の種類の實在としての身体的状態あるいは身体的過程が存在する」という説は否定されなければならない。「ある人が意図的に引き金を引いた」という主張は、「物的な舞台における行為の生起と心的な舞台における他の行為の生起」があったという「連言命題」の主張である、という説は、否定されなければならない (Ryle 1949, p.63; p.81)。「人間の生涯」は、身体的出来事と心的出来事の「二重の系列」からではなく、外的出来事と内的出来事の「一つの連鎖」から成る (Ryle 1949, p.167; p.240)。(外的出来事と内的出来事については、第一節(一)を参照。) 以上『心の概念』から引用したが、後にライルは、「行為傾向 (propensities)」「力 (powers)」「及び状態」に関し心身二元論が破綻していることを同書で示そうとした、と述べている (Ryle 1971/1962, p.188)。

(5) 同書は、Morris 1987を本文とし、それに序文 (pp.xii-xlix) を付したものである。序文は、Morris 1987に実質的な修正を要する箇所はないと述べられている (p.xii)。

(6) 同書は、Lukes 1974を第一章とし、それに新たに執筆された第二章及び第三章を加えたものである。Lukes 1974においては、力はデイスポジションとくらえられていない。

(7) 政治的力について、デイスポジションをキーワードとする研究が活発に行われているとは言えないであろう。最近刊行された、政治的力についての百科事典 (Dowling 2011) 及びハンドブック (Clegg and Haugard 2009) に「デイスポジション」の項目は

ない。

- (8) 傍点の箇所は、原文ではイタリックである。以下、引用中の傍点箇所は、原文ではイタリックである。
- (9) 『心の概念』では occurrence、incident、episode の語が使用されているが（たとえば p.116）、本稿では何れも「出来事」と訳す。
- (10) 「内的」の代わりに、「隠れている」(covert) の語が用いられる場合もある。次の箇所を参照。「方法を知っているということ」は、「傾向性」である。その「行使」は、「外部に現われることもあれば隠れていることもありうる」(pp.46-47; p.55)。
- (11) 従って、次の議論は妥当性を欠いている。「デイスポジションの表示」(display) — たとえばグラスが割れること — は出来事である故に観察可能であり、ライルの行動主義的存在論にとって受け入れ可能である。しかしデイスポジション自体は「中略」観察可能ではなく、それにとって受け入れ可能ではない」(Mellor 1974, p.163)。
- (12) この箇所では、デイスポジションが心身二元論批判と結びつけられている（注4を参照）。
- (13) 「性向を表わし」とあるが、ライルは、「欲する」などの語が性向という対象を指示していると考えているわけではない。この点は、第三節(一)で取り上げる。
- (14) ライルによれば、「驚愕のあまり声も出ない」における「驚愕」や、「恐怖のあまり身動きできない」における「恐怖」は、「動揺」である。「動揺」は出来事であり、「特定の動揺の生じやすさ」はデイスポジションである (pp.93, 95; pp.125, 128、一部拙訳)。
- (15) Morris 2002 の中で、デイスポジションが「習慣的デイスポジション」(たとえば「喫煙者である」こと)と「真の、あるいは条件的な、デイスポジション」(たとえば「溶解性」)に分類されている箇所もある (pp.22-23)。「物の比較的に持続する能力」は、後者である。
- (16) Dahl 1968, p.410.
- (17) 「一般的」の語は、この箇所では、部分的に可変的・開放的という意味で用いられている。本文の次のパラグラフを参照。
- (18) デイスポジションの「発現」の記述に用いられる語は、そのデイスポジションに対応する「仮言的諸命題」に含まれる語である。デイスポジションを「名指す」語が「発現」の記述に用いられないのは、それが「仮言的諸命題」に含まれないからである。
- (19) デイスポジション言明は、「物、動物、あるいは人間がある能力、傾向」[tendency—引用者注]ないし性向をもつという趣旨の言明、あるいはそれらがある傾向 [ability—引用者注]の支配下にあるという趣旨の言明 (p.133; p.172、一部拙訳) である。なお、ability は望ましからざるものである。ライルは、「綴り得る」「計算し得る」には「能力」が対応するが、「綴りを誤り得る」「計算間違いをし得る」には ability が対応する、と述べている (pp.130-131; p.183、一部拙訳)。
- (20) ライルによれば、人の「能力」や「性向」がいかなるものであるかは、「観察された行為や反応からの法則類似命題の帰納」により

把握される (p.172; p.246' 一部拙訳)。

(21) ライルが言明の意味とその検証方法を同一視しているという批判は、Sibley 1950 (pp.267-268) 'Stroll 2001 (p.122) においても為されている。

(22) ルイスの論文は、ライルには言及していない。

(23) 「私はし得た」は「もし私が選択したならば、私はしたであろう。」を意味する、というムーアの議論参照 (Moore 1912, p.131)。

(24) 「企画作業自体は企画されない」ことについて、また「企画することを企図する」ことをめぐる「無限背進」について、pp.30-31 (pp.30, 33' 一部拙訳) を参照。「いかに行為すべきか」ということに関する顧慮をめぐる「無限背進」について、p.31 (p.32) を参照。なおムーアによれば、「我々はそれを為すことを選択し得たであろう」は、「我々がその選択を為そうと選んだならば、我々はそのように選択したのである。」を意味する (Moore 1912, p.133)。

(25) 「能力」ではない「力」の一例は、自分が知っている言語で他人が語ったことを理解する「力」である。そうした「力」は、「随意に行使され得る」わけではない (Morris 2002, p.25)。なおモリスは、「能力」を意味するものとして「力」の語を用いる場合がある。たとえば、本文で取り上げる「認識・知識に関わらない能力」等を、「認識・知識に関わらない力」等とも呼んでいる (Morris 2002, pp.54-55)。

(26) 以下を参照。(具体例は、第二節(一)で取り上げる。)①「AがWを行えばXが結果するようなW (Aの一連の基礎行為) が存在するのであれば、AはXを行う認識・知識に関わらない (non-chisemic) 能力を持つ」。②「AがWを行えばXが結果するようなW (Aの一連の基礎行為) が存在し、Aは自分がWを行えばXが結果すると知っているのであれば、AはXを行う認識・知識に関わる能力を持つ」。③「AがWを行えばXが結果するようなW (Aの一連の基礎行為) が存在し、Aは自分がWを行えばXが結果すると知っており、AはXを行うことを欲するならばWを行うのであれば、AはXを行う認識・知識に関わる有効な能力を持つ」。「Wを行えばXが結果すると知って」おり、かつ「Xを行うことを欲する」にもかかわらず、たとえば性急さ故にW以外の基礎行為を行い、Xを行うことに失敗する者は、Xを行う「認識・知識に関わる有効な能力」を持たない (Morris 2002, pp.52-54)。

(27) 前者は Wright 1971 (p.68) からの、後者は Danto 1973 (p.28) からの引用である (Morris 2002, p.244 n.3)。

「基礎行為」の一例は、「腕を上げる」ことである。我々は、筋肉の動かし方そのものを知っているわけではなく、「腕を上げる」ことを通じてしか筋肉を動かすことはできない。従って、筋肉を動かすことではなく、「腕を上げる」ことが「基礎行為」である (Morris 2002, p.50)。

(28) ライルの一九五〇年の論文で、次のように述べられている。「PならばQ」と知っているということは、鉄道の切符を所持してい

- るようなものである。「中略」実際に「ロンドンからオックスフォードまでの」引用者注「切符を使って旅行せず、またロンドンにいることもオックスフォードに行くこともなく、その切符を所持していることが可能であるのと同様、推論を行わず、推論のための前提が成り立つことが決してない場合でさえも、推論許可証を所持していることは可能である」(Ryle 1971/1950, pp.239-140)。
- (29) ライルによれば、「虚栄心」の他、「情愛」「野心」「正義感」「欲望」「信念」なども「動機」である(pp.110, 113, 134; pp.153, 156, 189)。
- (30) 次の記述も参照。「ある行為がある動機からなされたものであると説明することはその行為をある隠れたlocuti—引用者注「原因との関連において説明することではない」(p.110; p.151)」「ある特定の動機ないし性向からある行為が為された」と説明することは、その行為をある特定の原因の結果として描写することではない。「中略」動機は出来事ではないのであり、したがってそれは原因となり得るタイプのものではない」(p.113; p.157 一部拙訳)。
- (31) ライオンズのこうした解釈は、ライルの議論の中でデイスポジション概念が指示的に機能しているという誤解に基づく。そうした誤解は、第三節(二)で取り上げる。
- (32) ライオンズは、「XはデイスポジションYを持つ」の「意味」をこのように「説明」すること自体は妥当であると認める(Lyons 1980, p.49)。
- (33) モリスによれば、「政治的目標としてのエンパワメント」に関する議論は、「評価的コンテキスト」におけるものである(Morris 2002, p.xxvii)。
- (34) この箇所における「力」は「能力」である(Morris 2002, pp.37, 46)。注(25)を参照。
- (35) ルークスは、「道徳的コンテキスト」及び「評価的コンテキスト」に関するモリスの議論を批判している(Lukes 2005, pp.66-68)。モリスの反論がある(Morris 2006, pp.128-130)。
- (36) ライルは、次の例も挙げている。「鳥が一定の状況下で或ることを実際に行うのは、いかにもその鳥らしき。何らかの特定可能な条件が成り立てば「中略」数多くの他の特定可能なことを行うのも、いかにもその鳥らしき」(p.142; 拙訳)。
- (37) 但し、「半仮言的」及び「雑種的」という訳語は、訳書p.199による。
- (38) タニーは、ライルのデイスポジション論に言及しつつ、出来事を「再記述」することによってそれを説明する方法を論じている(Taney 2009d, pp.98-100, 102)。タニーの議論によれば、鳥が「南へ飛んで行く」ことは、「渡っている」という「再記述」に基づいて説明される、ということになる。
- (39) 「出来事」と「デイスポジション」の区別、「定言的」と「仮言的」の区別、は成り立たないという批判は、Hampshire 1950(p.244)

でも為されている。しかし論拠としては、「定言的言明の例として通常挙げられるものの多く」は実は半・仮言言明であるというライルの指摘 (p.14; pp.199-200) が示されているに過ぎない。

(40) ライルは『心の概念』の序論で次のように述べている。同書の目的は、心について「新しい情報」を示すことではなく、「心的」な概念を含む命題と他種の命題の関係を明らかにすることにある (pp.7-8; pp.1, 3)。また第一章では、同書が「事実」のレベルの議論を展開していると誤解されてしまうことを予想している (p.16; p.12)。

しかし、概念・命題のレベルの議論と事実のレベルの議論を峻別可能であるかについては、疑問がある (Austin 1970/1950, p.46; Snowdon 2011, p.64を参照)。ライル自身、「第二の身分をもつ世界」「心身二元論が想定する心的世界—引用者注」で生起する事象など存在しない」「そのような身分のみならずそのような世界もまた存在しない」と論じている (p.16; p.230)。これは、事実のレベルの議論であらう。

(41) この点に関連するライルの議論を取り上げよう。「私は帽子を持っていた」という文は、私と帽子の関係について述べている。対照的に、「私は心が痛んだ (I had a twinge)」という文は、私と「心の痛み」の関係については述べていない (p.209; 拙訳)。(すなわち、「私は心が痛んだ」と述べても、「心の痛み」という対象が提示されるわけではない。)[imagine—引用者注]は生起するが、イメージは見られていない。「中略」旋律が私の頭の中を流れているとき、私にはいかなる旋律も聞こえてはいない」(pp.247-248; p.361、一部拙訳)。(すなわち、「イメージする」と述べても「イメージ」という対象は提示されておらず、「旋律が私の頭の中を流れている」と述べても「旋律」という対象は提示されていない。)[彼はこの抽象観念「等高線」という抽象観念—引用者注]を所有していると述べる場合、われわれは彼が自分の内面に注意を振り向けるならば彼のみが見出すことができる無形の何ものかが彼の内部に存在していると述べているわけではない」(p.308; pp.453-454、一部拙訳)。(すなわち、「抽象観念を所有している」と述べても「抽象観念」という対象は提示されていない。)

以下も参照。実際には「表示的」でない表現を「表示的」な表現と誤解することにより、「新種の対象 (objects) の存在」が示唆されてしまう (Ryle 1971/1931-1932, p.58)。「表現の意味」は「その表現を名とする存在物」であるという理解は、誤っている (Ryle 1971/1953, p.306)。

なおハンブシャーは、物体について用いられる語の転用—「心的な過程及び状態」の記述への転用—に対するライルの批判に言及している (Hampshire 1950, pp.239-240)。

(42) 類似の理解が、Heil 2003 (pp.61-62)、Mellor 1974 (p.161)、及び Mellor 2000 (p.765) に見られる。

(43) 「はじめに」で述べたように、本稿は、政治的力をデイスポジションととらえる研究分野に属している。従って、政治的力に関する



他の研究分野に寄与する点があるかについては、判断できない。但し、本稿で取り上げた問題―力に関する議論において力の語は指  
示的に機能してゐるかという問題―は、力をデウスボシションととらえない立場に対しても投げかけることができよう。

(44) Ryle 1949, p.44 (p.51 一部拙訳)。この箇所は、第一節(二)で取り上げよう。

(45) Choi and Fara 2014 の紹介を参照。能力論については、Maier 2014 を参照。

文献リスト

- Aiston, William P. 1978/1971. "Dispositions, Occurrences, and Ontology" in Raimo Tuomela, ed., *Dispositions*, Dordrecht, Reidel  
(*Canadian Journal of Philosophy*, 1, pp.125-154).
- Armstrong, D.M. 1968. *A Materialist Theory of the Mind*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Armstrong, D.M. 1973. *Belief, Truth and Knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Austin, J.L. 1970/1950. "Intelligent Behaviour: A Critical Review of *The Concept of Mind*" in Oscar P. Wood and George Pitcher,  
eds., *Ryle*, London, Macmillan (*Times Literary Supplement*, April 7).
- Bestor, Thomas Weston. 1979. "Gilbert Ryle and the Adverbial Theory of Mind." *Personalist*, 60(3), pp.233-242.
- Bird, Alexander. 2012. "Dispositional Expressions" in Gillian Russell and Delia Graff Fara, eds., *The Routledge Companion to  
Philosophy of Language*, New York, Routledge.
- Choi, Sungbo, and Michael Fara. 2014. "Dispositions" in Edward N. Zalta, ed., *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, [http://  
plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/dispositions/](http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/dispositions/)
- Clegg, Stewart R., and Mark Haugaard. (Eds.) 2009. *The SAGE Handbook of Power*. London: SAGE.
- Dahl, Robert. 1968. "Power" in David L. Sills, ed., *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol.12, New York, Free Press.
- Danto, Arthur C. 1973. *Analytical Philosophy of Action*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dennett, Daniel C. 2002. "Re-introducing *The Concept of Mind*" in Gilbert Ryle, *The Concept of Mind*, Chicago, University of  
Chicago Press.
- Dowding, Keith. (Ed.) 2011. *Encyclopedia of Power*. Los Angeles: SAGE.
- Geach, Peter. 1960. *Mental Acts*, 2nd edition. Bristol: Thoemmes Press.
- Hampshire, Stuart. 1950. "(Critical Notices) *The Concept of Mind*". By Gilbert Ryle. London: Hutchinson's University Library

- (Senior Series), 1949. Pp.vi+334, 12s. 6d.," *Mind*, 59 (234), pp.237-255.
- Harré, Rom. 2007. "An Extended Semantic Field of Dispositions and the Grounding Role of Casual Powers" in Max Kistler and Bruno Grassmannou, eds., *Dispositions and Causal Powers*, Aldershot, Ashgate.
- Harré, Rom. and Edward H. Madden. 1975. *Causal Powers: A Theory of Natural Necessity*. Oxford: Blackwell.
- Heil, John. 2003. *From an Ontological Point of View*. Oxford: Clarendon Press.
- Hofstadter, Albert. 1951. "Professor Ryle's Category-Mistake," *Journal of Philosophy*, 48 (9), pp.257-270.
- Levi, Isaac, and Sidney Morgenbesser. 1978/1964. "Belief and Disposition" in Raimo Tuomela, ed., *Dispositions*, Dordrecht, Reidel (*American Philosophical Quarterly*, 1 (3), pp.221-232).
- Lewis, David. 1997. "Finkish Dispositions," *Philosophical Quarterly*, 47(187), pp.143-158.
- Livingston, Paul M. 2004. *Philosophical History and the Problem of Consciousness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lukes, Steven. 1974. *Power: A Radical View*. London: Macmillan.
- Lukes, Steven. 2005. *Power: A Radical View*, 2<sup>nd</sup> edition. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Lyons, William. 1980. *Gilbert Ryle: an Introduction to his Philosophy*. Atlantic Highlands: Humanities Press.
- MacDonald, Margaret. 1951. "Professor Ryle on the Concept of Mind," *Philosophical Review*, 60 (1), pp.80-90.
- Maler, John. 2014. "Abilities" in Edward N. Zalta, ed., *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, <http://plato.stanford.edu/archives/fall2014/entries/abilities/>
- Martin, C.B., and John Heil. 1998. "Rules and Powers," *Philosophical Perspectives*, 12 (*Language, Mind, and Ontology*), pp.283-312.
- Mellor, D.H. 1974. "In Defense of Dispositions," *Philosophical Review*, 83 (2), pp.157-181.
- Mellor, D.H. 2000. "The Semantics and Ontology of Dispositions," *Mind*, 109 (436), pp.757-780.
- Merricks, Trenton. 2007. *Truth and Ontology*. Oxford: Clarendon Press.
- Moore, G.E. 1912. *Ethics*. London: Oxford University Press.
- Morris, Peter. 1987. *Power: A Philosophical Analysis*. Manchester: Manchester University Press.
- Morris, Peter. 2002. *Power: A Philosophical Analysis*, 2<sup>nd</sup> edition. Manchester: Manchester University Press.
- Morris, Peter. 2006. "Steven Lukes on the Concept of Power," *Political Studies Review*, 4 (2), pp.124-135.
- Nagel, Jack H. 1975. *The Descriptive Analysis of Power*. New Haven: Yale University Press.

- Park, Shelley M. 1994. "Reinterpreting Ryle: A Nonbehavioristic Analysis." *Journal of the History of Philosophy*, 32(2), pp.265-290.
- Place, Ullin T. 1999. "Ryle's Behaviorism" in William O'Donohue and Richard Kitchener, eds., *Handbook of Behaviorism*. San Diego, Academic Press.
- Prior, Elizabeth. 1985. *Dispositions*. Aberdeen: Aberdeen University Press.
- Rey, Georges. 1997. *Contemporary Philosophy of Mind: A Contentiously Classical Approach*. Oxford: Blackwell.
- Ryle, Gilbert. 1971/1931-1932. "Systematically Misleading Expressions" in Gilbert Ryle, *Critical Essays: Collected Papers* Volume 2, London, Hutchinson (*Proceedings of the Aristotelian Society*, 32, pp.139-170).
- Ryle, Gilbert. 1949. *The Concept of Mind*. London: Hutchinson's University Library. (古・トペル『心の概念』 坂本百六・井上裕子・服部登喜雄 'オオキョウブ' 一九七七年)
- Ryle, Gilbert. 1971/1950. "If, 'So' and 'Because'" in Gilbert Ryle, *Critical Essays: Collected Papers* Volume 2, London, Hutchinson (originally published in Max Black, ed., *Philosophical Analysis: A Collection of Essays*. Ithaca, Cornell University Press).
- Ryle, Gilbert. 1971/1953. "Ordinary Language" in Gilbert Ryle, *Critical Essays: Collected Papers* Volume 2, London, Hutchinson (*Philosophical Review*, 62(2), pp.167-186).
- Ryle, Gilbert. 1971/1962. "Phenomenology versus 'The Concept of Mind'" in Gilbert Ryle, *Critical Essays: Collected Papers* Volume 1, London, Hutchinson ("La phénoménologie contre *The concept of mind*," *La philosophie analytique*, no.4, pp.65-104).
- Scholz, Oliver R. 2009. "From Ordinary Language to the Metaphysics of Dispositions --- Gilbert Ryle on Disposition Talk and Dispositions" in Gregor Damschen, Robert Schepf, and Karsten R. Stüber, eds., *Debating Dispositions: Issues in Metaphysics, Epistemology and Philosophy of Mind*, Berlin, Walter de Gruyter.
- Schwitzgebel, Eric. 2002. "A Phenomenal, Dispositional Account of Belief." *Notes*, 36(2), pp.249-275.
- Sibley, Frank. 1950. "A Theory of the Mind." *Review of Metaphysics*, 4(2), pp.259-278.
- Snowdon, Paul F. 2011. "Rylean Arguments: Ancient and Modern" in John Bengson and Marc A. Moffett, eds., *Knowing How: Essays on Knowledge, Mind, and Action*, Oxford, Oxford University Press.
- Stroll, Avrum. 2001. "Gilbert Ryle (1900-1976)" in A.P. Martinich and David Sosa, eds., *A Companion to Analytic Philosophy*, Oxford, Blackwell.
- Tanney, Julia. 2009a. "Foreword" in Gilbert Ryle, *Critical Essays: Collected Papers* Volume 1, New York, Routledge.

- Tanney, Julia. 2009b. "Foreword" in Gilbert Ryle, *Critical Essays: Collected Papers* Volume 2, New York: Routledge.
- Tanney, Julia. 2009c. "Gilbert Ryle" in Edward N. Zalta, ed., *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, <http://plato.stanford.edu/archives/win2009/entries/ryle/>
- Tanney, Julia. 2009d. "Reasons as Non-causal, Context-placing Explanations" in Constantine Sandis, ed., *New Essays on the Explanation of Action*, Basingstoke, Palgrave Macmillan.
- Tanney, Julia. 2009e. "Rethinking Ryle: A Critical Discussion of *The Concept of Mind*" in Gilbert Ryle, *The Concept of Mind*, London, Routledge.
- Whittle, Ann. 2009. "Causal Nominalism" in Toby Handfield, ed., *Dispositions and Causes*, Oxford, Clarendon Press.
- Williams, John N. 2008. "Propositional Knowledge and Know-How," *Synthese*, 165 (1), pp.107–125.
- Wright, Georg Henrik von. 1971. *Explanation and Understanding*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Wright, J.N. 1959. "Mind and the Concept of Mind," *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary Volume, 33, pp.1–22.
- Wrong, Dennis H. 1995/1979. *Power: Its Forms, Bases, and Uses, with a New Introduction by the Author*. New Brunswick: Transaction (Oxford: Blackwell).